

【次の文章を読み、以下の間に答えよ】

(時間：二十分 配点：五十点)

八幡別当頼清が遠流^{注(1)}にて、永秀法師といふ者ありけり。家貧しくて、心すけりける。夜昼、笛を吹くより外の事なし。かしかましさにたへぬ隣り家、やうやう立ち去りて後には、人もなくなりけれど、さら^xにいたま^す。さこそ貧しけれど、落ちぶれたる振る舞ひなどはせざりければ、さすがに人いやしむべき事なし。頼清聞き、あはれみて使ひやりて、「なかは何事もたまはせぬ。かやうに侍れば、さらぬ人だに、事にふれてさのみこそ申し承る事にて侍れ。うとくおぼすべからず。便りあらん事は、憚らずのたまはせよ」といはせたりければ、「返す返す、かしこまり侍り。年来も申さばやと思ひながら、身のあやしさに、かつは恐れ、かつは憚りてまかり過ぎ侍るなり。深く望み申すべき事侍り。すみやかに参りて申し侍るべし」といふ。「何事にか、よしなき情けをかけて、うるさき事やいひかけられん」と思へど、「彼の身のほどには、いかばかりの事かあらん」と思ひあなづりて過す程に、ある片夕暮れに出で来たれり。則ち出で合ひて、「何事に」などいふ。「あさからぬ所望侍るを、思ひ給へてまかり過ぎ侍りし程に、一日の仰せを悦びて、左右なく参りて侍る」といふ。「疑ひなく、所知など望むべきなめり」と思ひて、これを尋ねれば、「筑紫に御領多く侍れば、漢竹^{注(2)}の笛の、事よろしく侍らん一つ召して給はらん。これ、身に取^エりてきはまれる望みにて侍れど、あやしの身には得がたき物にて、年来えまうけ侍らず」といふ。思ひの外に、いとあはれに覚えて、「いといとやすき事にこそ。すみやかに尋ねて、奉るべし。その外、御用ならん事は侍らずや。月日を送り給ふらん事も心にくからずこそ侍るに、さやうの事も、なかは承らざらん」といへば、「御志はかしこまり侍り。されど、それは事欠け侍らず。二三月に、かく帷一つまうけつれば、十月までは、さらに望むところなし。又、朝夕の事は、おのづからあるに任せつつ、とてもかくても過ぎ侍り」といふ。「げに、すきものにこそ」と、あはれにありがたく覚えて、笛いそぎ尋ねつつ送りけり。

注(1) 遠流：遠い親類 (2) 所知：領地 (3) 漢竹：中国原産の竹。多く笛に用いた。

問一 傍線部①よしなきの本文中における意味で最も適当なものを選択肢から一つずつ選べ。(二点)

- 1, よくない 2, たちが悪い 3, 理由のない 4, つまらない 5, いい加減な

問二 傍線部あゝうの本文中における意味を書け。(各三点計九点)

問三 傍線部ア、エの助動詞の本文中における意味を次の選択肢の中から一つずつ選べ。(各二点計八点)

- 1, 婉曲 2, 推量 3, 断定 4, 推定 5, 意志 6, 尊敬 7, 使役

問四 傍線部①、③の敬語について：

(一) 敬語の種類を言え。また (二) 誰から (三) 誰への敬意か、選択肢から選べ。(各三点計九点)

- 1, 頼清 2, 永秀法師 3, 筆者 4, 読み手

問五 傍線部②を表す部分を、本文中から書き抜け。(五点)

問六 傍線部③を現代語訳せよ。(五点)

問七 頼清が、傍線部④のように言った理由を簡潔に書け。(十点)

問八 本作品は「発心集」という説話集である。以下の作品から同ジャンルのものをすべて選べ。(二点)

- 1, 歎異抄 2, 古今著聞集 3, 増鏡 4, 十訓抄 5, 日本霊異記 6, 懐風藻